地域振興の動力となるツーリズム

東京大学名誉教授
月尾嘉男（つきお よしお）

昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究するとともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。

期待されるツーリズム産業

産業を一次、二次、三次に分類する手法は、イギリス出身でオーストラリアのクイーンズランド大学教授であった経済学者のC・G・クラークが一九四一年に提案した概念である。農業・漁業・林業・鉱業など自然から社会が必要とする資源を採集する一次産業、その資源を加工して有用な製品に加工する製造・建設などを二次産業、それらの製品を必要とする場所に流通させる運輸、販売、通信などを三次産業に分類した。

当時（一九四〇）の日本では産業生産の割合は一次が二四%、二次が三六%、三次が四〇%であったから、クラークの分類は妥当であった。しかし現在（二〇二三）の比率は一%、二九%、七〇%に激変しているから、社会全体の産業構造を表現するのには適切ではなくなってきた。そこで登場したのが、大半の先進諸国では七割以上になっている三次産業を社会の現状を適切に反映するように細分するという手法である。

その三次産業を細分した分野の一種が、観光や旅行などを対象にしたツーリズム産業である。英語を使用しているのは観光や旅行だけではなく、それらが提供する教育や学習、さらには地域にもたらす産業振興なども包含しているため、適切な日本の言葉が存在しないからである。実際、ツーリズムの元祖とされるイギリスのT・クックが一九世紀中頃から開始した観光旅行は、一種の社会教育をめざした団体旅行であった。

日本では一九八七年に複数の中央官庁が共同で「総合保養地域整備法（リゾート法）」を制定し、観光を地域発展の推力にしようという政策が登場した。全国各地が検討を開始し、宮崎、三重、福島では具体計画も発表された。しかし箱物行政という言葉が象徴するような施設の建設が中心で、バブル経済の時期と重複して地価高騰の原因ともなり、構想を発表した地域は「地価監視区域」に指定されるなど、大半は目標を実現できなかった。

オーバー・ツーリズムの登場

しかし経済活動の中心であった二次産業は発展途上諸国に急速に移行している日本にとって、ツーリズムには重要な役割が期待されている。第一は実利であり、コロナウイルス蔓延（まんえん）の影響で減少していた外国人観光客も昨年は過去最高の三六九〇万人になり、観光消費も約八兆円と推定されている。しかし、これは利点だけではなく、オーバー・ツーリズムという言葉に集約される地域社会へのマイナスの影響が課題になっている。

実際に京都では外国人観光客が殺到して史跡の魅力が毀損（きそん）されているとか、安価な路線バスを利用するために市民の利用が困難になっているなどの問題が発生している。さらに外国資本がリゾート開発のために国土を過度に買収しているという問題も発生している。そこで国際連合世界観光機関（UNWTO）は「地域の産業・環境に適合した将来の文化・経済への影響に配慮した観光」をめざすことを提言している。

新規のツーリズムの出現

このような背景から登場してきたのが「サステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）」や「コミュニティ・ツーリズム（地域主体の観光）」という発想である。事例を紹介すると理解しやすい。山形の出羽三山の山伏修行は一四〇〇年余の歴史のある行事で何日もの荒業をするが、最近では本物の修行よりも日数や内容を短縮した修行を一般に体験させている。外国人参加者も増加し、一時は閑散としていた宿坊も繁盛しつつある。

三重県鳥羽市は市域全体が伊勢志摩国立公園に指定され、リアス海岸の景観や鳥羽城跡の史跡など魅力豊富な地域である。一九九〇年代には年間の観光客数が約七〇〇万人であったが、最近は約三九〇万人まで減少してきた。そこで漁業協同組合や観光関連企業などが協力して、数多く存在する離島での生活やカヤックなど海上スポーツを体験できるサステナブル・ツーリズムを推進し、エコツーリズム大賞を受賞するまでの成功を達成している。

新潟県柏崎市の最南にある高柳地区は鉄道も高速道路も通過していない過疎・高齢の地域である。一九九〇年代には宿泊施設「高柳じょんのび村」や自然体験施設「こども自然王国」などを整備し、交流人口が人口の一〇〇倍以上になったが、次第に低迷してきた。そこで「じょんのび村協会」の社長を民間から招聘（しょうへい）し、東北や関東へ誘致活動をしたところ、地域以外からの訪問客数が六割になるほど急増して元気になりつつある。

現在の日本は人口減少、経済停滞という巨大転換に直面しており、東京周辺を例外として、従来の手法で地域を発展させることは困難になっている。必要なことは過去の体験を棄却して、新規の発展の法則の発見をすることであり、その一例が「サステナブル・ツーリズム」や「コミュニティ・ツーリズム」である。どのような地域にも自然資源や歴史資産は存在する。それらを活用することが地域を新規の方向に転換させる動力となる。